

〔巻頭言〕

家族像の多様化に伴う看護基礎教育における家族看護学の到達目標の検討を

静岡県立大学看護学部

式守 晴子

2011年6月に開催された国際家族看護学会で、世界各地で高度な家族看護が実践されているのを目を見張る思いであった。世界各地の家族看護の高度な看護実践はその国の健康課題、文化、社会、保健医療の制度などによって独自に発展してきている。日本でも家族支援専門看護師が2008年に誕生し、現在は14名の専門看護師が活躍している。今後10年以内に、(平成33年度までに)専門看護師の養成課程に必要な単位数が38単位に増える。それに伴って家族支援専門看護師の役割や機能が広がるだろうと期待している。

更なる高度な家族支援専門看護師の育成を目指して、大学院での教育課程の充実を検討することは当然だが、それと並行して、学部教育の中で家族看護への関心や家族支援専門看護師への芽を育てることが必要ではないだろうか。また、今後さらに進む少子高齢社会で、学部卒業のジェネラリストが家族看護の視点を持つことは必須のことであろう。私は、現在は学部教育の中で家族看護を担当している。以前家族支援専門看護師育成に携わってきたので、高度な看護実践の場ではこのような知識があったら役立つだろう、このような技術はこういった方法で教えればどうだろうかと考えられるが、学部教育の家族看護では何を教えたらいのか、ジェネラリストに必要な家族看護の知識、技術の到達度をどのレベルにすればよいのだろうかと思う。

その理由の一つは学生が持つ家族像の変化である。10年以上前、学部学生が、複数の家族員と看護師役に分かれて、家族のドラマを作成し、看護師役が面接しながら問題をひも解くというロールプレイの授業をおこなっていた。そこで作成されるドラマは、多少戯画化されていたが、いい加減な父親、しっかりもののお母さんと性格描写が豊かで、嫁と姑の闘い、絶対的な権限のある家長の存在、家族の健康問

題にうろたえる親戚、兄弟間の葛藤、実家のソーシャルサポートなど、家族内外で起こりうる問題が映し出されていた。看護師役も授業で習った家族発達段階を踏まえた質問によって、問題を明らかにし、さらに家族関係を調整する言葉かけができていた。これは、当時の学生は、家族内の役割を、程度の差はあっても、明確なものとしてとらえており、家族内で起きるであろう葛藤も理解できていたからと推察できる。

一方、今学生が抱く家族像は、枠組みも、人物像も平たんでほんやりとしているように思える。東京から1時間の地方都市においても家族像は変化してきている。グローバル化する社会の中で、伝統的な日本の三世代の家族像はもはやすたれ、核家族の“平均的な家族像”も失われて、多様化した家族像は学生には捉え難いのではないだろうか。少子化が進み、一人っ子同士が結婚して生まれた子にとって、おじさんやおばさんは存在せず、親戚は祖父母と、運がよければ両親のいとこがいるだけである。シングルマザーも少なくないため、ソーシャルサポートはママ友が一番と考えている場合もある。出産時に里帰りをしない割合も高いというデータもある。教員が「結婚して子供が生まれ・・・」というと、すぐに学生から「結婚していない人の家族って?」と質問がでる。こうした状況で育った学生と、“家族とは”、“家族の役割や機能とは”、という家族看護の基本的な概念を一つ一つ確認し、共有しながら、授業を進めて行かなければならない。しかし、家族像が多様な状況であるからこそ、多様な家族を支える家族看護がますます重要になると考える。今後、学会で、看護基礎教育において教授すべき、ジェネラリストに必要な家族看護の知識と技術の到達目標が検討されることを期待する。